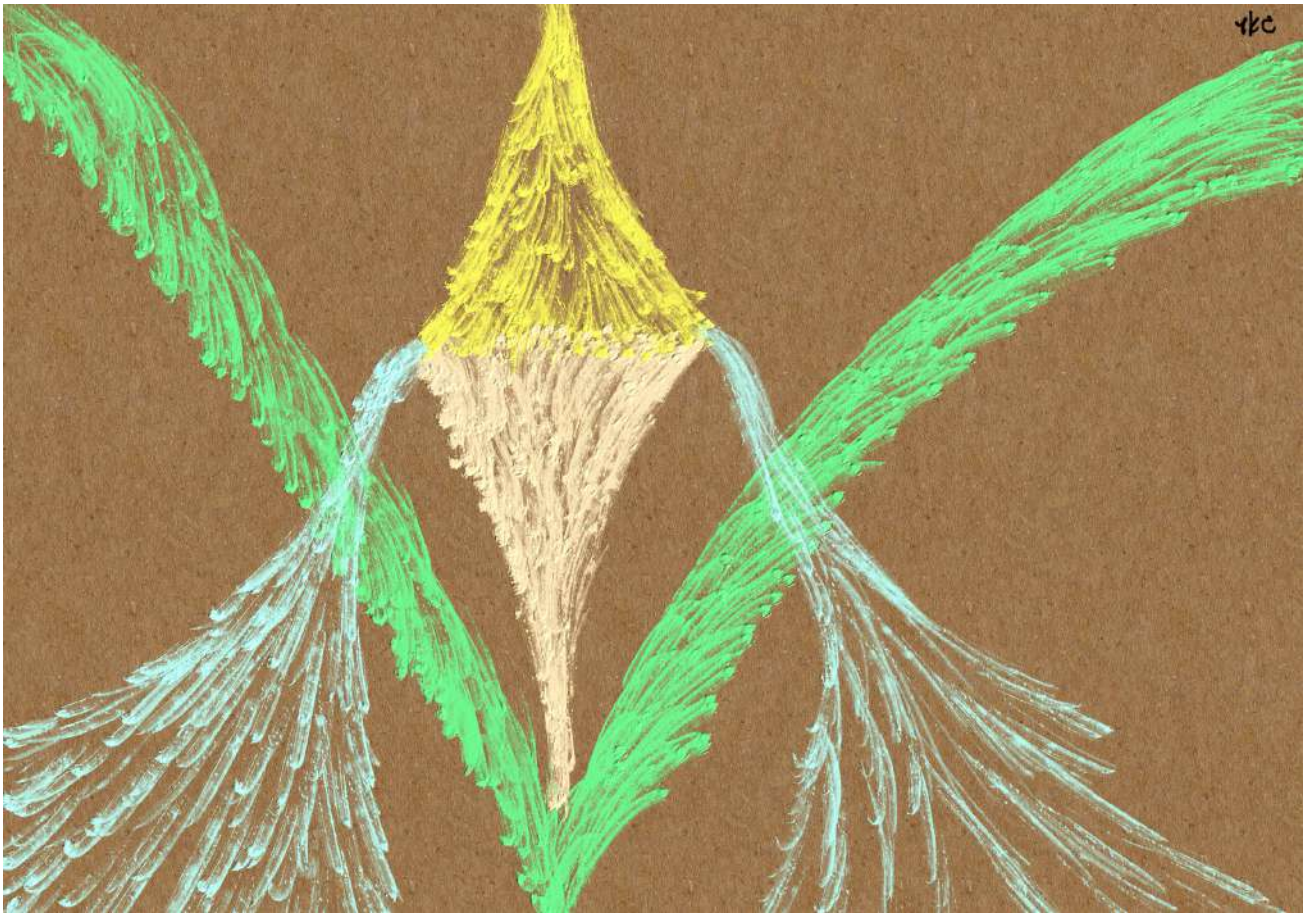
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 308

Website:「発達理論の学び舎」



No.1248 朝の祈りと祝い_Prayer and Celebration in the Morning

© YOHEI KATO 2020

目次

6141. 今朝方の夢

6142. 芸術と社会/美的経験と開く力

6143. 美を感じさせてくれる財布を購入して

6144. 美的経験と共感能力

6145. 今朝方の夢

6146. 社会的想像力と芸術体験

6147. 書籍の一括注文を終えて

6148. 自己統合と遊びと余暇

6149. 音楽理論・作曲理論の探究/インド音楽のリズムの適用に向けて

6150. フィンランド湖畔での生活を夢想して:今朝方の夢

6151. 3つの価値/固有で多様な時間感覚/TINA

6152. 哲学的アンダーレイバリング/正と負

6153. 今朝方の夢

6154. 愛着と温かみのある時間

6155. 共有責任/パルテノン神殿/オランダのコロナの感染状況

6156. 内側の声を発見すること/現在の自由・将来のより大きな自由

6157. 今朝方の夢

6158. 個人投資家にとって魅力的に感じられるオランダの税制について

6159. トークンエコノミーの探求/価値の再定義

6160. 秋の一時帰国に向けて:石川県金沢市の兼六園

© YOHEI KATO 2020

6141. 今朝方の夢

今日は午後に時間を取って、財布を購入するために街の中心部に散歩がてら買い物に行く。明日の午後は、今月と来月分の書籍を一括注文する。その中に、音楽が社会に果たす役割について考察した書籍をいくつか購入する。また、本来人間に治癒と変容及び解放をもたらすはずの音楽が、逆に人間を縛り、洗脳のために使われてきた歴史について言及した書籍も購入しようと思っている。

中世の大学の4大科目として、音楽、算数、幾何、天文があった。その中でも音楽は、世界を解釈するための学問であった。当時の発想においては、音楽は世界を構成する原理だったのだ。つまりこの世界は音に満ちていて、音楽とは音に満ちた世界に調和を与えるものとして捉えられていたのである。そのような話をどこかで聞いた。

現在も引き続き、作曲実践を通じて音楽理論を少しずつ学んでいる。この世界に調和を与えるような音楽。それはどれだけ小さいものであってもいい。自分を取り巻く世界に小さな調和をもたらすような音楽を作っていきたいという思いを新たにする。

今日は少しばかり印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、観客で一杯の野球グランドの上にいた。どうやら私は野球の試合に参加しているようであり、ポジションはセンターを任されていた。試合に参加していたのは、中学校時代の野球部のメンバーが主であり、野球部ではないのは私ぐらいしかいないのではないかと思った。

ピッチャーは、野球部に所属していた小柄な友人（TS）であり、序盤はまずまずのピッチングをしていた。ところが、途中から投球フォームが崩れ、随分と打たれ始めた。用いられていたのは金属バットであり、金属バットがボールを弾き返す独特の高音がグラウンドに響き渡ることが多くなっていた。私が守っているポジションにはほとんどボールが飛んでくることがなかったが、最後に野球部のある友人（HY）が打ったボールがライナーでセンター前に転がってきた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は前職時代にお世話になっていた女性のマネージャーのお子さん2人に声を掛け、彼らと話をしていた。そのマネージャーの方にお子さんがいたことを知らず、最初は驚いた。5歳ぐらいの男の子と、3歳ぐらいの女の子がいて、2人ともとても可愛らしかった。しかし、男の

子の方はヤンチャ盛りなのか、私にも色々とちょっかいを出してきて、その対応が少し厄介だと思っていた。

最後の場面として、外国人の女性と英語を話す場面があった。そこからはずっと英語で話をしており、日本語で話す時よりも口数が多く、話の中で、爆弾の比喩について私は述べた。その比喩がどのようなコンテクストで出てきたのか不明であり、それが何を指していたのかは覚えていない。そこから引き続き英語で何かを説明していたのを覚えている。フローニンゲン:2020/8/22(土)07:12

6142. 芸術と社会/美的経験と開く力

時刻は午後2時半を迎えた。つい先ほど激しい雨が降り、数分してそれが止んだ。今は雨が止んで、日が照り始めている。遠くの空にはまだ雨雲が見えており、また雨が降るかもしれないという。もう少しばかり読書をしてから街の中心部に買い物に出かける際には、折り畳み傘を持参しようと思う。

このところは毎月結構な量の書物を購入していたこともあり、書斎やリビングには本の置き場がなくなってしまうほどになった。近々本棚を整理して、音楽関係の書籍や美学関係の書籍を一箇所にまとめて所蔵しようと思う。それらの書籍は今は書斎の本棚ではなく、ソファの上に積み重ねられているものが多い。それらは本棚にしまっておいた方が、調べ物をする上では便利だろう。

本日から、イェール大学が提供しているMOOCの“Music and Social Action”と、デューク大学が提供しているMOOCのExperiments with Sound”を受講し始めた。昨日言及したMOOCの動画は、配信中のものは全て見てしまったので、動画コンテンツが追加されるまで、また別のMOOCを受講しようと思ったのである。今日は今のところ、前者のコースの動画を視聴していた。今の私の関心の1つである、芸術が社会に果たす役割を直接的に取り上げているコンテンツであり、とても得るものが多い。

ジョン・デューイが指摘しているように、芸術が日々の生活や社会から分離してはならない。もちろん、芸術が仮に日常や社会よりもより高き場所にあったとしても、芸術体験がいかに日常生活や社会を豊かにしていくのかの視点を忘れてはならないように思う。芸術を単なる日常の慰めにするの

ではなく、日常や社会をより豊かにしていくためのものとして捉え、日常と社会を包摂するものとしての芸術体験を広く多くの人に届けていくこと。それはとても大切なことのように思う。

そこから、美意識の歪みと異常な美意識について考えを巡らせていた。例えば、サイコパスのように、人を殺めることに対して美的感覚を抱くという歪な美意識の存在を忘れてはならない。そうした歪んだ美意識以外にも、社会道徳的に問題のある美意識についても考察を深めていく。このあたりに倫理や道徳という善と関わった美の探究分野がある。

教育哲学者のマキシン･グリーンは、美的経験は私たちを開く力があると述べている。まさにそれこそが、芸術の教育的･発達的効果なのだろう。美的経験は、新たな感覚や新たな世界へと私たちを開いてくれる。またそこには、自己を開く力があり、さらなる可能性に自己を開いてくれることにもつながる。もちろん全ての芸術作品にそうした力があるとは言えないだろう。それではどのような性質を持った作品がそうした力を持っているのかを考えていく。少なくとも、ハーバート･マルクーゼが述べているような「一次元的世界」から私たちを解放してくれるような超越的世界を描いていることや、超越的な感覚をもたらしてくれることは、開く力を持った作品の1つの条件だろう。フローニンゲン：2020/8/22（土）14:42

6143. 美を感じさせてくれる財布を購入して

時刻は午後7時を迎えた。つい今し方夕食を摂り終えた。今日は午後に激しい雨が数分ほど降ったり、午前と午後にも何度か数分ほどの雨が降ったが、それ以外の時間には太陽が出ていた。気温に関しても申し分なく、とても涼しげで過ごしやすかった。

今年の秋に日本に一時帰国する際の格好に関して参考にするために、今の気温においてどのような格好で過ごしているのかを覚えておこうと思う。おそらくフローニンゲンの今の時期の気温がちょうど日本に一時帰国している最中の気温ではないかと思う。正確な気温についてはもう少し調べてみる必要があるが、秋のその時期においてはまだジャケットやコートはそれほど必要ないだろう。問題なのは行きと帰りに際して、その頃のオランダが寒いであろうということだ。

今年もまた日本でスーツを着る必要があるので、スーツを1着ほど持参するが、それ以外にはできるだけ荷物を増やしたくはない。今のところはスーツのジャケットを私服のようにして着ていこうかと考

えている。昨年は別途私服用のジャケットを着て行ったが、日本の9月末から10月の初旬はまだまだ暑くジャケットは不要であり、スーツと合わせて少しかさばってしまった。そうしたことからも、今回の一時帰国ではスーツを私服代わりに着ていこうかと思う。

今、ゆっくりと夕日が西の空に沈んでいこうとしている。そう言えば今朝方の早朝未明に、寝室の窓際に小鳥たちがやって来て、物音を立てていたことをふと思い出した。

すぐに小鳥たちだと思ったが、寝ぼけていたこともあり、宇宙人の小人がやって来たのかもしれないと思っていたことを面白く思う。寝ぼけている意識状態においては、リアリティの捉え方が随分と異なり、そこでのリアリティの認識もまた一定の真実を内包している。

今日は夕方に街の中心部に出かけ、財布を購入した。店の名前は“Talens Lederwaren”であり、ここは革製品専門店である。店に到着してすぐに、店員の女性に挨拶をし、財布を探しているということを伝えると、すぐに財布売り場に案内してもらい、色々と対応をしてもらった。アテネで財布を盗まれてしまったことを伝えると、その店員はとても共感的に話を聞いてくれたことが好印象だった。その女性の対応が特別なのではなく、実はオランダの教育では対話能力と共感能力を育むことに力を入れており、見知らぬオランダ人と話をする機会がある時には、大抵共感を持って話を聞いてもらっているという感覚がある。

その女性の店員は、私がどのような財布を求めているのかを尋ねてくれ、今回私はポケットにスッと入るようなコンパクトな財布が欲しいと思っていた。すると、その条件にぴったり合致する財布のコーナーを教えてもらった。それはその店が大切にしているオランダのブランドのようであり、“SECRID”という名前のブランドだ。

オランダがキャッシュレス社会であるため、紙幣や硬貨をほとんど持ち歩くことのない私にとって、必要なカードを入れるコンパクトな財布がいいなと思っており、まさにその希望に合致する機能性とデザインを兼ね備えた財布に出会うことができた。このブランドの財布には美意識を感じ、自分がブラウンのカラーを求めていることを伝えると、店員の女性は10種類ぐらいの財布を出してくれた。そこから私は、芸術作品を味わうかのように1つ1つの財布のデザインを吟味し、しばらくしてから1つに決めた。結局、とてもシンプルなデザインのものを選ぶことにした。この財布であれば、どのようなズ

ボンのポケットにもかさばることなく財布を入れることができる。今後の旅ではスリには気を付けようと思うが、カバンに財布を入れる必要がなくなったことは喜ばしい。

レジで会計を済ませた私は、早速その財布をその場で使わせてもらうことにした。というのも、その時までの私には財布がなく、今日はカード類を小さな封筒に入れていたのだ。新しい財布にカード類を入れ、そのコンパクトさにとても満足した。私は笑顔で店員の女性にお礼を述べ、颯爽と店を後にした。フローニンゲン：2020/8/22（土）19:38

6144. 美的経験と共感能力

時刻は午前7時を迎えた。今朝方未明に雨が降っていたようであり、窓に少しばかり水滴が付着している。今は少し雲が見えるが、空は晴れている。ここから午後まで晴れが続き、午後から夕方にかけて小雨が降るようだ。

フローニンゲンはめっきり秋らしくなり、とても涼しい。今の気温は15度であり、肌寒さがあるほどだ。今少しばかり東京の気温を調べてみたところ、この秋に一時帰国する10月中旬から11月初旬の気温が、ちょうど今のフローニンゲンの気温に近いようなので、どのような格好で過ごせばいいのかの参考になる。その頃の日本はまだジャケットはあまり必要ではなく、どうやら長袖で過ごせるぐらいの良い気候のようだ。ひょっとすると、日本に到着してすぐの頃は、まだ半袖でいいぐらいかもしれない。最高気温を見ているとそのようなことを思う。どのような服を持っていくのかについては、一時帰国の日が近づいてきてから再度日本の気温を調べよう。

昨日購入した財布を改めて眺めていると、デザインに美しさがあり、それでいてコンパクトであることがとても魅力的だ。財布を開くことなくカードをスライドさせて取り出す便利な機能があり、店員の女性も真っ先にその機能を説明してくれた。

以前の財布にはなかったカードプロテクション機能もあり、それは他者が街中などでカード番号の読み取りをするという犯罪行為からカードを守ってくれるものだ。店員の女性も7年ほど私が購入した財布と同じものを使っているそうだが、カードをスライドさせる機能の箇所が壊れたことはないようだ。一応、財布には3年ほどの保証期間があるようなので安心である。

昨日、日常生活と芸術との連続性について書き留めていたように思う。その補足として、美的体験は確かにそれ相応のコンテクストが必要であり、特に芸術作品や芸術行為を通じた美的経験を得るには、特別なコンテクストが必要になる。様々に考慮するべきことがあるが、善の観点で言えば、大切なことはそのコンテクストに身を置ける機会の平等性が確保されているかどうかだろう。特権階級だけがそうした美的経験を得られるというのでは、美の領域における不善、不公平さが生じてしまう。このテーマは、美的経験に伴う倫理的な問題であり、この点についても考えを深めていこう。

昨日から受講しているイェール大学のMOOCの講義は充実している。講義の中で言及されていたジョン･デューイの“Art as Experience”を再読してみようと思った。デューイが述べているように、芸術作品から美的経験を得るためには、知的理解を超えて共感能力が必要なのだ。その作品の主題に対する共感、作者の思想や体験、そして内的感覚に対する共感、作品が作られた時代背景に対する共感など、様々な共感が作品鑑賞に伴えば、美的経験はより豊かになるだろう。逆に共感能力が欠落していれば、美的経験が得られなくなってしまうだろう。

共感能力が欠如している現代において、豊かな美的経験というのは得られにくくなっているのかもしれない。美的経験の条件としての共感能力を育むことが大切であるということが見えてきて、このあたりはこれまでの自分の探究領域や実践領域から関与できることかもしれない。作品、作者、及び作品が作られた時代に対する共感に加えて、作品から喚起される自分の感覚そのものへの共感、つまり自己の深層部分への共感が得られるような美的経験の大切さについて昨日は考えていた。フローニンゲン：2020/8/23（日）07:22

6145. 今朝方の夢

時刻は午前7時半を迎えようとしている。今、朝日の優しい光が地上に降り注いでいる。雨が止んだ後の涼しげな秋の朝の朝日は格別である。そこには優しさがある。

今日は午後に時間を取って、書籍の一括注文をしようと思う。今回は30冊から40冊ぐらいの購入になりそうだ。アマゾンを通じて書籍を購入する前に、再度書籍の概要や中身を調べることを考えると、書籍の購入を完了するのに2～3時間ほどかかると見積もっておこう。今回も多岐にわたる分野の書籍を購入しようと考えているが、その中でも美学に関しては、すでに美学書が随分とあるため、

音楽美学に特化したものを購入しようと思う。それに加えて、社会学的な観点が盛り込まれた社会変革を志向する美学思想に関する書籍を購入しよう。例えば、ヨルゲン･ハーバマス、ニコラス･ルーマン、ハーバート･マルクーゼの書籍などである。

それでは今朝方の夢について振り返り、朝の創作活動と読書に取り掛かりたい。夢の中で私は、大学時代を過ごした国立市にいた。ある知人の女性と国立の街を散歩しながらどこかに向かっていた。その時の気候は春のようであり、とても麗かな雰囲気が街に広がっていた。その日は晴れていたこともあり、春の陽気を感じながら散歩することはとても気持ちが良かった。

その知人の方と私はあるテレビ番組に出演することになっていて、これからその打ち合わせのためにテレビ局にいく必要があった。そのテレビ局は丘の上にあり、今いる街の中心部からテレビ局の建物を眺めることができた。

知人と会話をして歩いていると、程なくしてテレビ局に到着した。建物の中に入り、指定された会議室に入ろうとしたときに、その前にトイレに行っておこうと思った。なぜか私はその時にオイルプリングをしていたので、オイルを口に含んだままだとディレクターやプロデューサーの方たちに挨拶ができないと思った。

トイレのドアを開けると、ちょうど若いプロデューサーの方とすれ違い、向こうは挨拶をしてきてくれたのだが、まだ口にはオイルが含まれていたので私は会釈することしかできなかった。しかし、向こうは私の口に何か入っていることに気付いてくれ、お互いに笑顔でその場をやり過ごした。

トイレから出て会議室に入ってみると、知人はその場にいた方たちとすでに面識があるようで、話が盛り上がっていた。先ほどまでは知人は少し歩き疲れているように見えたのだが、元気そうに話をしている姿を見て嬉しく思った。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、レストランが併設されたオフィスビルの中にいた。時刻はまだ早朝のようであり、どういうわけか私はレストランにいて、これから朝食を摂ることになっていた。普段リンゴ1つしか朝食に食べない私は、レストランに並ぶ食事の量と種類に驚かされた。私は朝食を食べたいと思わなかったのだが、近くにいた元気な高齢の女性が私にカレーを差し出してくれた。それは結構なボ

リュームであり、朝からカレーを食べることに少しばかり抵抗があったが、一応カレーを受け取ることにした。

今朝方はその他にも夢を見ていたように思う。レストランの場面と連続して、確かそのオフィスビル内にある図書室のような場所に行き、受付の白人男性にある書籍を探してもらうようにお願いしていたことを覚えている。フローニンゲン:2020/8/23(日)07:47

6146. 社会的想像力と芸術体験

──自然の厳しさの中に生きる時、人間は真剣になる。この本気な姿勢が、人間の中に清々しい美しさを作り出す。他人を気にして生きる人間には、この美しさがない──辻邦生

時刻は午後2時を迎えた。今、穏やかな空が広がっていて、早朝の天気予報とは異なって空が晴れている。

今朝方は、大きくとても綺麗な虹が見えた。ぼんやりとしばらく虹を眺めていると、虹も移動することを発見した。雲や太陽の移動に伴って、虹も移動するのだ。

昨日と今朝方の日記の中で、昨日足を運んだ革製品専門店の店員の女性が見せていた共感能力と、それとは別に美的経験について書き留めていたように思う。それらを総合して考えてみると、オランダ人が芸術を愛していることと彼らの共感能力の高さにはやはり何か関係があるかもしれないと思った。

教育によって共感能力が育まれ、さらには生活の中に芸術が浸透していることによって、オランダ人は日々日常生活を営む中で自然と美的経験を得ているのかもしれない。他者に共感し、それでいて芸術作品から美的経験を得ることができる生活。それは1つの幸福の証であり、オランダの人たちの幸福度が高いというのはそうした点にも理由があるのではないかと思う。

美的経験は、超越する力と共感する力の双方を必要とする。自己を超え出て行き、そこで美的感覚を引き起こすものと共感的な一体化を果たす必要がある。その結果として、美的高揚感、ないしは美的恍惚感が初めて生まれる。自己は本質的に超越力を持っていて、だからこそ人間は一生涯

を通じて発達を遂げていける。ところが現代は、そうした人間の本質的な力が抑圧されてしまっていたり、病に疾患してしまっていたりする。そこに介入の要所がある。

今日も昼時に、イェール大学が提供するMOOCを視聴していた。その中で、教育哲学者のマキシン･グリーンの指摘が印象に残っている。それは、「社会的想像力（social imagination）」を養うものとしての芸術体験という考え方である。

社会の変革に社会的想像力は不可欠であり、そうした想像力こそが不在の不在化を推し進めていく。キング牧師があの歴史的なスピーチで体現していたのがまさに社会的想像力である。それは単に理想の状態を想像するだけではなく、そうした理想の状態に近づくためのビジョンを提示するものだ。そして、具体的な実行策まで想像していく力こそが、社会変革的なたくましい想像力だと言えるだろう。

今日はこれから書籍の一括注文をする。注文するジャンルの順番としては、まずはシュタイナーの社会･経済思想に関する書籍を購入し、その後に環境経済学や現代貨幣論に関する書籍を購入する。その後に、作曲理論や音楽美学に関する書籍、そして社会変革を志向した美学書を購入する。フローニンゲン：2020/8/23（日）14:22

6147. 書籍の一括注文を終えて

時刻は午後7時半を迎えた。今日は午後から数時間をかけて書籍の吟味をし、一括注文をした。自分で作った文献リストから購入するべき書籍を厳選するのに随分と時間がかかったが、無事に先ほど注文を終えた。結局今回は、イギリス、オランダ、ドイツのアマゾンを比較して、合計50冊ほど購入した。

内訳として、イギリスのアマゾンから30冊、オランダのアマゾンから17冊、ドイツのアマゾンから3冊、比較としてアメリカのアマゾンも確認したが、送料が高くついたので、今回はアメリカのアマゾンから注文することはなかった。分野は多岐に渡っており、現代貨幣理論、環境経済学、貨幣哲学、霊性と芸術、音楽美学、音楽理論などに及ぶ。著者に関しても自ずと多岐に渡るものになったが、いずれもその領域で第一線の学者である。

今回の購入もいつものように、何か自分に強く響くものがなければ購入することをやめにした。合計で50冊ほど今の自分に響く書籍を見つけることができたのはとても嬉しい。それらの出会いには本当に感謝したい。

これにて9月には書籍を大量に注文する必要はないだろう。購入したとしても少しばかりにしておこう。日本に一時帰国するのが10月の中旬の早い時期なので、仮に9月に注文したとしても中旬までにしておこう。今のところ50冊の書籍をゆっくりと読み進めていこうと思っているので、おそらくは9月には書籍を購入することはあまりないと思うが、もし注文するのであればその点について注意しよう。日本に帰った時には和書を持って帰れるだけ購入しようと考えている。今年の秋から冬にかけては、読書を通じて自己を深めていくことにより力を入れていこう。

備忘録として、本日購入した50冊を書き留めておく。書籍が届き次第、すぐにそれらの書籍に取り掛かっていくことにする。

1 Rethinking Economics: Lectures and Seminars on World Economics: Lectures and Seminars on World Economics

2 Toward a Threefold Society: Basic Issues of the Social Question

3 Social Threefolding: Rebalancing Culture, Politics & Economics – An Introductory Reader

4 The Fundamental Social Law: Rudolf Steiner on the Work of the Individual and the Spirit of Community

5 The Social Question: A Series of Six Lectures by Rudolf Steiner

6 The Philosophy of Money (Routledge Classics)

7 Modern Monetary Theory and its Critics

8 How Money Works: The Facts Visually Explained

9 Trade Wars Are Class Wars: How Rising Inequality Distorts the Global Economy and Threatens International Peace

10 What's Wrong with Economics?: A Primer for the Perplexed

11 Prosperity without Growth: Foundations for the Economy of Tomorrow

12 Ecological Economics, Second Edition: Principles and Applications

13 Ecological Economics and the Ecology of Economics: Essays in Criticism

14 Doughnut Economics: Seven Ways to Think Like a 21st-Century Economist

15 Economics for the Common Good

16 Capitalism without Capital: The Rise of the Intangible Economy

17 The Value of Everything: Making and Taking in the Global Economy

18 Commodities and Capabilities

19 Development as Freedom

20 Being Human Margaret Archer

21 Spiritual Capital: Wealth We Can Live by

22 Hyperobjects: Philosophy and Ecology after the End of the World

23 Music And Philosophy by Gabriel Marcel

24 Spirit and Art: Pictures of the Transformation of Consciousness

25 Colors of the Soul: Physiological and Spiritual Qualities of Light and Dark

26 Musical Truth

27 Musical Truth 2

28 Philosophy of Music: An Introduction

29 The Philosophy of Rhythm

30 New Directions in Music

31 Deep Refrains: Music, Philosophy, and the Ineffable

32 Perspectives on Musical Aesthetics

33 Music as an Art

34 The Aesthetics of Music

35 Aesthetics of Music: Musicological Perspectives

36 A Concise Survey of Music Philosophy

37 Philosophy of New Music

38 Meter as Rhythm: 20th Anniversary Edition

39 Structural Hearing: Tonal Coherence in Music

40 The Space that Separates: A Realist Theory of Art

41 Habermas and Aesthetics: The Limits of Communicative Reason

42 One-Dimensional Man: Studies in the Ideology of Advanced Industrial Society

43 The Aesthetic Dimension: Toward a Critique of Marxist Aesthetics

44 Art as a Social System

45 Kierkegaard: Construction of the Aesthetic

46 Essays on Music by Theodor Adorno

47 A Composer's World: Horizons and Limitations

48 Phases: The Spiritual Rhythms of Adult Life

49 Phases: Crisis and Development in the Individual

50 Libidinal Economy

フローニンゲン：2020/8/23（日）19:54

6148. 自己統合と遊びと余暇

時刻は午前6時を迎えた。今、ようやく空が明るくなってきた。秋を迎えたフローニンゲンは、日が昇り始めるのが随分と遅くなった印象だ。日没に関しても、最近は午後9時頃には随分と暗くなっている。

今、少し小雨が降っていて、午前中にいったん止むらしいが、午後から夜にかけて再度小雨が降るようだ。今日の最高気温は18度、最低気温は10度とめっきり秋らしい気温だ。今週は全て20度を下

回る日になるようだ。昨日調べたところ、今のこのくらいの気温が日本の11月初旬の気温である。この体感を忘れないようにして、秋の日本の一時帰国の際の衣服を選ぼうと思う。

昨日もまた雑多なことを考えていた。教育哲学者のマキシン･グリーンの「社会的想像力」について色々と思うことがあった。想像力を働かせてより良き社会について考えることは、その実現の打ち手を見つける道を開いていく。そして、課題解決の打ち手もまた社会的想像力から生み出される。

この社会的想像力の喚起と涵養に貢献を果たすのが芸術作品であり、芸術活動であるとグリーンは述べている。もちろん、この点についてもどのような種類と質の芸術作品なのかという問題があるだろうが、芸術全般に不在の不在化をもたらす力があることは確かであり、不在の不在化の中に社会的想像力が含まれていることを考えると、グリーンの指摘にはうなづけることがある。昨日注文した50冊の書籍の中には、社会変革に資する芸術とはいかなるものなのかについて考えるヒントになるような書籍が何冊かある。それらの書籍の到着が今から楽しみだ。

詩人のフリードリヒ･シラーはかつて、「自己統合は、仕事を離れた遊びや余暇の中で実現される」ということを述べていた。その言葉の意味について昨日は少し考えていた。おそらく、自己統合に資する要素は仕事を通じても獲得されるのだろうが、それらを統合するためには一度仕事から離れ、遊びや余暇に没頭する必要があるのかもしれない。

一度対象から離れ、再び対象に戻ってきた時に、対象の本質に至るという考え方がある。それは対象から離れている熟成の期間の大切さを示唆してもいる。遊びや余暇が統合の力を後押しするというのも興味深い。これはひょっとしたら、遊びや余暇の持つ純粋性によるものだろうか。

作為や意図を離れて、小さな自我から私たちを解放させてくれる力を持つ遊びや余暇。最近では残念ながら、遊びや余暇さえもが物質消費対象になってしまい、さらには小さな自我の囚われを強化させる形で営まれているように思える。本来遊びや余暇は私たちを解放し、さらなる変容に向けての後押しをしてくれるものなのではないかと思う。

ここ最近は、日々の読書のおかげか、色々と考える観点やテーマが増え、ゆっくりとだが着実に自分の思想が育まれつつあるのを感じる。今日もまた、朝日がゆっくりと昇るかのように、ゆっくりと歩みを進めていこう。フローニンゲン：2020/8/24（月）06:24

6149. 音楽理論・作曲理論の探究/インド音楽のリズムの適用に向けて

時刻は午前6時半を迎えようとしている。今、空がだいぶ明るくなってきた。引き続き小雨が降っており、雨滴が書斎の窓に付着している。

昨日、書籍を一括注文した後に、書斎の机に置いている本を少しばかり取り替えた。これまでは机の右側の2箇所に書物を積読しており、そこから日々読む本を選び、読み終えたら本棚やソファの上に置くようにしていた。また、これまでは机の左側に楽譜を積み上げていたのだが、それを音楽理論や作曲理論の書籍に取り替えるということをした。今後参考にする予定の楽譜とすでに参考済みの楽譜は、テレビ台に大量に積み上げられており、直近で参考にしている楽譜に関しては、机の横の椅子の上に積み重ねるようにした。

ここからは作曲をするという実践を大切にしていきながらも、やはり理論も日々学んでいこうと思った次第である。そもそも、理論学習を通じて新しい観点や発想に出会えることが面白いのだ。そこにも喜びを見出しているがゆえに、理論学習は多くの実りをもたらしてくれるに違いない。

昨日もふと思ったが、今手元にある音楽理論書や作曲理論書を見ると、音楽学校の博士課程に在籍している人たちやひょっとすると教授陣並みの文献を保有しているように思えた。昨日もまた何冊か理論書を購入し、今後は音楽理論に関する特定のジャーナルの定期購読を考えている。良さそうなジャーナルが見つかれば、過去のバックナンバーを全て購入してもいいかもしれないと考えている。そこまですれば、音楽理論に関しては本当に専門家の仲間入りを果たすように思える。

シラーの言葉で言えば、音楽理論の探究は趣味のようなものであり、1つの立派な遊びであると言えるかもしれない。音楽理論を学習することによって音楽関係の大学院で職を得るとか、そのようなことは一切考えていない。純粋に音楽理論の探究に楽しさと喜びがあるからそれを行なっているのであり、それは仕事とは言えないものである。

昨夜、ソファに積み重ねられた音楽関係の文献を眺めている時に、インド音楽のリズムに関する書籍を購入していたことを知り、今日からそれを活用して作曲する時間を設けたいと思う。その書籍は、“Applying Karnatic Rhythmical Techniques to Western Music”というタイトルであり、まさにインド音楽のリズムを西洋音楽に適応することを意図して書かれたものだ。

ここ最近は、ショーンバーグがハーモニーについて解説した分厚い“Theory of Harmony”という書籍をもとに、ハーモニーの学習を進めている。この書籍に掲載されている譜例をもとに作曲をする際にリズムを工夫することをここ数日間自然と行なっていたところ、偶然ながら昨夜上記のインド音楽のリズムに関する書籍をソファで見つけた。

今日からは、ションバーグの上記の書籍をもとに作曲をする際に、インド音楽のリズムを適用してみようと思う。インド音楽のリズムを具現化させてみることを通じて、東洋的な何かを感じられるかもしれない。そのようなことを考えていると、今後は種々の哲学領域の哲学思想や哲学的概念を音に実装させ、概念の喚起力を音に体現させる形で、音の流れを通じてそれをリアリティに溶け込ませていくことを意識してみようと思う。フローニンゲン：2020/8/24（月）06:40

6150. フィンランド湖畔での生活を夢想して：今朝方の夢

新たな週を迎えたフローニンゲン。季節はめっきり秋であり、今週はとても涼しい日々が続く。正直なところ、朝はかなり肌寒く、もう長ズボンを履いたほうがいいかもしれないと迷ってしまうほどだ。ほんの10日前までは猛暑日が続いていたのに、そこから一転して秋に入ったことに驚いてしまう。

フィンランドの移住を数年後に実現させようと考えていることが影響してか、フローニンゲンの天気について毎日確認することに合わせて、時折ヘルシンキの気温も確認している。どうやら今の時期はフローニンゲンとヘルシンキはそれほど気温が変わらないぐらいに両者涼しい。ヘルシンキの方がより寒くなり始めるのは9月の半ば頃からかと思う。

昨年日本に一時帰国する時にヘルシンキを経由したのだが、9月末にはもう気温がマイナスの世界になっていたことを思い出す。おそらくその日が特別寒いのかもしれないと思ったが、飛行場から空港に向かうシャトルバスの中で見た週間天気予報の感じからすると、9月末のヘルシンキはそれぐらいに寒いようだった。

白の美しさ。白銀世界の美しさについてぼんやりと思いを馳せる。今よりもより静かで自然を感じられる場所で、慎ましい生活を日々営んでいこう。ソローやシベリウスのように湖畔でそうした生活をすること。それはいつか必ず実現するだろう。もうそこに向けてゆっくりと動き始めている自分がいる

のだ。想像力を働かせた不在の不在化がこれから継続していけば、それがフィンランドに自分を導いてくれるだろう。

実はオランダの郊外もまたとても落ち着いているのだが、これまでそれほど郊外に足を運んだことがないことを思った。何しろ車や自転車といった移動手段を持っていないのだから、郊外に出かけていくことはほとんどないのだ。過去、片道10kmほど郊外の方に走って散策に出掛けたことや、バスに乗って郊外の様子をチラリと見たことがあるぐらいだ。今度何かの機会に、街の中心部の自転車屋でサイクリング自転車でも借りて、郊外の散策に出掛けてみてもいいかもしれない。

今日はまだ夢について振り返りをしていなかったので、夢について振り返り、創作活動と読書を行いたいと思う。今日は午前中に1件ほどオンラインミーティングがあり、午後には「一瞬一生の会」の音声教材を作ろうと思う。

夢の中で私は、日本の旅館の畳部屋にいた。これからそこで夕食を食べることになっていた。畳部屋を見ると、すでにいくつかの長机がセッティングされており、夕食を食べに来た人たちが随分着席していた。見ると、前職時代の会社の知り合いや大学時代の友人たちもいた。私は彼らと一緒に夕食を食べることになり、席についた。すると、前職時代の女性の先輩が、食事の前の挨拶をしてくれと述べてきた。それはとても面倒であり、彼女は私をからかうためにそれを依頼してきたのだとすぐにわかった。

すると、私の内側から攻撃性のある自己がむくむくと姿を現し、食事の前の挨拶の言葉の代わりに、「お前らと一緒に飯を食べると不味くなる」と言いそうになったが、「お前らと飯を一緒に食べることはできない」とぶっきらぼうに述べた。そして、近くにあったお盆を持って、部屋の外で1人で飯を食べることにした。

そのような夢の場面があった。次の夢の場面では、大学時代にサークルで一緒だった友人と話をしていたのを覚えている。彼は名門の商社に入社し、今でもそこで働いている。彼から仕事の話を聞いていたことを覚えている。その他にも夢の場面があったように思うが、今となってはそれらの記憶はもうない。それらの記憶は、潮目のように再び無意識の世界の中に帰って行った。再び潮が満ち

る時に、それらの記憶はまた別の夢の形をして現れてくるだろう。フローニンゲン：2020/8/24（月）07:15

6151. 3つの価値/固有で多様な時間感覚/TINA

時刻は午後7時を迎えた。今、穏やかな夕日がフローニンゲンの街に降り注いでいる。

今日はとても涼しい1日であり、午前中には長ズボンを履いて過ごそうかと思ってしまうぐらいだった。明日は午前中から夜にかけて雨が降るようなので、可能であれば雨が降る前に買い物に出かけよう。

夕日を眺めながら、全ての存在者に宿る神聖さについて考える。その輝きは基底価値（ground value）がもたらすものなのかもしれない。そして存在者には規定価値以外にも、内在価値（intrinsic value）と外在価値（extrinsic value）がある。それら3つの価値を考えていくことは、価値論を様々な領域に適用していく際に重要になるだろう。それら3つの価値を少なくとも考慮した対話と実践の大切さを思う。

時間の流れ。とても緩やかな流れがここにある。それを客観的な基準で見れば、時間は万民に公平に流れていると感じる。一方で、私たちには固有の内的時間と内的時間感覚があることを忘れてはならない。今という共通の現在の中に、様々な現在が存在していることを見逃してはならない。今私が感じているこの瞬間と、他の人のそれは異なるはずなのだ。時間感覚の固有性と多様性についても無視できない点である。

現在存在している社会的な課題が次の世代に再生産される流れを食い止めること。それについて今日も考えていた。昨日注文した書籍は、その方法を見出していくことに役に立つに違いないと思う。早くもオランダのアマゾンから明日に数冊ほど書籍が届くようだ。

ロイ･バスカーが提唱したTINA(There is no alternative)という言葉について考える。TINA は、不在の不在化を阻み、不在の不在化を諦める思考停止の状態を招く。絶えず日記を書くという行為は、TINAに陥ることを防ぎ、新たな考えや感覚を見出していくという点において、不在の不在化を後押しする。絵画の制作も作曲もTINAに陥ることを防ぐ営みであり、この世界に存在していなかったもの

をこの世界に在らしめるという行為である。明日もまたそうした実践に従事していこう。今日もまた充実感と納得感のある1日だった。フローニンゲン：2020/8/24（月）19:17

6152. 哲学的アンダーレイバリング/正と負

時刻は午前6時を迎えようとしている。今、空がダークブルーに変わり始めていて、1日の始まりを静かに伝えている。ここ最近はめっきり寒くなり、日の出の時間も随分と遅くなった。今朝は曇りのようであるから、尚更暗さを感じる。

今日は正午より雨が降り、どうやらそこから夜にかけてだけではなく、明日も含めてずっと雨が降るようだ。特に明日は、強風の伴う雨が降るとのことなので、明日は1日中自宅にいることになるだろう。今日は昼前に、雨が降る前に近所のスーパーに行き、必要なものを購入しておこうと思う。

昨日に引き続き、ロイ・バスカーの批判的実在論について少しばかり考えている。「批判的実在論」の中の「批判」というのは、このリアリティにおいてまだ見えていないものがなんなのかを批判的に検証する精神や、原因分析をする際には、今目に見えている原因が果たして本当の原因なのだろうかといったことを考察する批判的精神を意味する。また、この世界においてまだ存在していないもの、つまり不在のものを在らしめるにはどうすればいいのかを批判的に検討していく精神も含まれる。

批判的実在論のもう1つの特徴としては、「哲学的アンダーレイバリング（philosophical underlabouring）」というものがある。これは、社会科学を含めた科学において、そこに横たわるガラクタのような思想的枠組み（誤った認識）を取り除き、科学的探究がより健全なものになり、科学的発見事項の解釈がより健全なものになっていくことを志向するものだ。より正確には、科学がより健全な発達を遂げ、社会の幸福の実現につながっていくことを志向しているのが哲学的アンダーレイバリングと呼ばれるものだ。

アマゾンからの連絡によれば、一昨日に注文した書籍が本日から届き始める。そういえば、今回の一括注文において、スロヴェニアの哲学者のスラヴォイ・ジジェクの書籍は注文しなかった。先日アテネに訪れた時に、街の大型書店に足を運び、そこでジジェクの書籍を何冊か見かけたが、あまり

響くものがなかったので、今回は注文を控えた。その時手にしなかった書籍に関しては面白いものもあるかと思うので、ジジェクの書籍を検討するのはまた今度にしたい。

ジジェクの洞察とバスカーの洞察には重なるものがある。例えばジジェクは、私たちの主体は、実在の正の場を正の実体として認識する傾向があるが、実はそこには絶えず「負（不在のもの）」が内在していて、その負が正を補足しているという点を見落としてしまう傾向にあると述べている。人との相互作用、社会との相互作用を含め、その中にも絶えず負が介在しているのだが、私たちはそこにあるもの、つまり正の実体だけを実体だと認識してしまう。私たちの全ての活動には負が介在していて、正としての実体は負によって支えられているということを見抜いたことはジジェクの洞察の面白さである。

この世界にまだ実在していないものとしての負が絶えず存在していて、それは実体を見えないところで下支えしているということ。また、不在のものを不在化を通じて実体として顕現させることは、負のものを代理させる形でこの世界に在らしめる行為だと言えるかもしれない。すなわち、今こうして日記を書いていることや、これから行う早朝の絵画の創作と曲の創作は全て、不在という負で満ちた世界から負の代理としての正を形にしていく行為だと言えるかもしれない。そのようなことを考えながら、本日の創作活動に従事したいと思う。フローニンゲン：2020/8/25（火）06:20

6153. 今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えようとしている。今、ようやく辺りが明るくなった。今日もまた、自分の取り組みをゆっくりと前に進めていこう。

それでは今朝方の夢について振り返りをしておきたい。夢の中で私は、男女共同で使用するシャワールームにいた。そこはジムにあるようなシャワールームであり、すでに2人の男性がシャワーを使っていた。彼らのうちの1人がシャワーを使い終えた後に、私はシャワーを使うことにした。しばらくシャワーを浴び、シャワールームから出ようとした時に、見知らぬ女性がやってきて、その女性としばらくそこで立ち話をすることになった。するとそこからは、続々と男女がシャワールームにやってきた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私はある著名な投資家の自宅にいた。厳密には、その投資家の方と一緒に、自宅にあるプールで遊んでいた。私以外にも何人かの若手投資家が招待されていて、私たちは投資の話など一切することなく、プールで子供のように遊んでいた。そのプールは海のように広く、ある若手投資家が、その著名な投資家が所有するジェットスキーのような乗り物を使って、アクロバティックなパフォーマンスを披露し始めた。

一堂、そのパフォーマンスに感銘を受けたのだが、その若手投資家は少し調子に乗って、最後に空に向かって思いっきりジャンプをし、水面から数メートルほどの高さに到達し、そこからそのまま水面に落下した。すると、ジェットスキーの板の部分が破損してしまい、著名な投資家は呆れた表情を見せながらも、笑っていた。ジェットスキーを破損させた若手投資家に対してその投資家の方は、冗談交じりで、弁償代を1万円ほど請求した。私はそれを聞いた時、思わずその金額の少なさに笑ってしまった。その投資家も若手投資家も笑っていたが、若手投資家はちゃんと1万円を払った。

すると、私の体はいつの間にか、実際に通っていた中学校にあった。靴箱で靴を取り、自宅に戻ろうとしている最中だった。靴箱から歩き始めてすぐに、見知らぬ女性に声をかけられた。どうやらその女性も投資家のようだった。しかし、投資については初心者のようであり、投資手法を教えて欲しいと私にお願いをしてきた。その女性はまだ若く、カネの亡者のような目をしていて薄気味悪かった。そこで私はその女性を相手にせず、空を飛んで逃げることにした。しかしその女性はバネのようなジャンプ力を使って、私の身体に触れてこようとした。それがさらに気持ち悪かったので、私は高度を上げてなんとか振り切って逃げようとした。

自宅のマンションに到着し、そこは何重にもセキュリティーがあるので安心かと思ったが、気が気ではなかった。そのマンションには投資で成功した友人が住んでいて、彼のところに立ち寄ってから自宅に戻ろうと思った。彼の自宅のベルを鳴らし、部屋に入れてもらったところで、ストーカーのような先ほどの女性について話をし、彼に注意を促した。今朝方はそのような夢を見ていた。

実際のところは、覚えていた最初の夢の場面の前にも別の夢があったように記憶している。また途中にも別の場面が挿入されていたように思う。それらはスリル感と喜びの感覚を引き起こす場面だったことだけは覚えている。フローニンゲン：2020/8/25（火）06:44

6154. 愛着と温かみのある時間

──芸術が始まる時、言葉が沈黙の国を過ぎてゆく──辻邦生

時刻は午前10時を迎えた。日記を書く際に、自分はよくその瞬間の時刻に言及している。それは何も、外側の客観的な時間を確認するためだけではなく、その内側にある自分固有の時間に気づくためでもある。何よりも後者の方が自分にとって大事なのだ。

物への執着はあれど、愛着を喪失した現代人。元々私たち日本人は、稲を刈り取る行為と結び付ける形で「ハカ(計･量)」という言葉を生み出した。すなわち、時間を計測する際には、稲の愛着の感情が根底にあったはずなのだ。それが今となってはどうだろう。時間の計測において、時間を感じることの中に何かしらの愛着はあるだろうか。

物への執着はあれど愛着のない現代人は、時間をこの現実世界と離れた抽象的な産物としてしか認識できなくなっているのかもしれない。端的には、物を物としか認識できないほどに想像力が枯渇し、人と同じように物を愛するような気持ちを失い、愛するという行為を通じて時の肉感を感じることができなくなってしまっているのだ。

日記の冒頭でよく時間について言及するのは、時の肉感を感じるためなのかしれない。そして、その肉感のある時の背後にある何らかの愛着の感情を大切にしようとしていることの現れなのかもしれない。音楽が時間芸術という側面を持っていることから、失われた温かみのある時間感覚を取り戻すような曲が作れないかと考える。本当の安らぎは、機械的な均質的時間の中にはない。真の安らぎは、肉感のある温かみのある固有の時間の中に寛いだ時に得られるものなのだ。

一昨日に書籍を50冊ほど注文したのだが、本日、文学批評家のエドワード･サイードが音楽に関する興味深い書籍を数冊ほど出版していることを知った。また彼と交友関係のあったアルゼンチン人のピアニスト･指揮者のダニエル･バレンボイムも音楽の力に関するいくつか興味深い書籍を出しており、近日中にそれらを購入しようと思う。そのような文献調査を進めながら、芸術作品を鑑賞する時には、ことさら創造的参加をするという意識を持ということを改めて思った。絵画や音楽を鑑賞する際のみならず、楽譜を読む時にもそうした意識を持つ。

芸術への創造的参加を通じて、豊かな人間感覚を取り戻しながらにして育み、社会変革の道を模索していく。すなわち、芸術への創造的参加を人間の非人間化(dehumanization)に対抗する形で営む人間性回復実践として行っていく。そのようなことを先ほど考えていた。フローニンゲン:2020/8/25(火)10:16

6155. 共有責任/パルテノン神殿/オランダのコロナの感染状況

時刻は午後7時を迎えた。先ほど夕食を摂っている最中に、部屋の呼び鈴がなり、注文していた書籍を受け取った。先日注文した50冊のうちの数冊が届けられた。また後ほど開封しよう。

天気予報の通り、今日は夕方から雨が降り始めた。明日は1日中雨が降るようだ。今日の気温は低く、午前中一杯は長ズボンを履いていた。明日以降もずっと同じぐらいの気温であるため、朝は長ズボンを履く必要がありそうだ。もうすっかり秋である。

人生を通じて、絵画と音楽の創作プロジェクトを進めていくこと。それは1つの大きなプロジェクトであり、決して終わりはない。日常の様々な事柄や体験を題材に、ただひたすらに創作活動を続けていくこと。それを大切にしたい。また、日々の生活を通じて見たことを見たと言い、感じたことを感じたと言うこと。そのシンプルなアクションが大切だ。なぜなら、それを見たのは自分だけかもしれないし、それを感じたのは自分だけかもしれないのだから。このリアリティの一端を見たのは自分だけかもしれず、それを感じたのは自分だけかもしれないのだ。

コスモスの多様性。多様なコスモスの一端を見た幸運、感じた幸運に出会えたのなら、その幸運を他者に分かち合う必要があるのだ。見たこと、感じたことを形にして伝える共有責任が創作活動に従事する者にはあるように思える。全ての人が何らかの形で創作人なのであるから、共有責任とは全ての人に平等に備わっている普遍的責任なのだ。

午後にふと気づいたのだが、アテネのホテルから見えていたのは、確かにパルテノン神殿だったということだ。私の知識があやふやだったため、ホテルのレストランのテラス席から最初にその建造物が見えた時、パルテノン神殿だと思った。しかし、それは丘の上にあったから、あれはアクロポリスの

丘の何か別の建物かもしれないと数日後に思ったのだ。しかし本日ふと、アクロポリスの丘にあるのがパルテノン神殿だということを今更ながら気づき、思わず笑ってしまった。ホテルの朝食の時に、レストランのテラス席から毎朝見ていたのはやっぱりパルテノン神殿だったのだ。それを思うと、あの朝の時間がまた貴重な時間だったことに気づく。

その他にも本日初めて知ったこととして、オランダ12州のうち、コロナの感染者数はフローニンゲン州が1番少なかったようだ(370人:現在時点)。フローニンゲン州よりも人口密度の低い州はたくさんあることを考えると、フローニンゲン州の対応が功を奏したのかもしれない。

感染者数だけで見れば、フローニンゲンの感染者数は群馬県の感染者数(384人)と同じぐらいだ。一方、オランダで一番感染者数が多かった州は、ロッテルダム、ハーグ、ライデンから成るゾイトホラント州であり、その数は12,189人ほどである。日本で言えば、1番感染が多かい東京都(19,428人)と2番目に感染が多い大阪府(7,901人)の中間ぐらいの人数だ。人口密度の観点で言えば、ゾイトホラント州の感染率は東京や大阪よりも高かったのだろう。そうした調べ物をしながら、この秋の一時帰国について思った。

今のところ、9月から関空も欧州からのフライトを受け入れるようなので、何とか一時帰国できそうだ。もちろん、方針の変更などがあるような先の見えない世の中なのでまだ何とも言えないかもしれないが、とりあえず現時点においては今年の秋に日本に一時帰国できそうである。フローニンゲン:2020/8/25(火)19:24

6156. 内側の声を発見すること/現在の自由・将来のより大きな自由

時刻は午前6時半を迎えた。今朝は起床から雨である。今も雨が天から滴り落ちていて、フローニンゲンの街を清めている。今日は風も少々強く、どうやら1日中雨のようだ。昨日買い物を済ませていたこともあり、今日は1日中家の中にいることになるだろう。

昨日、オランダのアマゾンから6冊の書籍が届いた。それらは全て経済学に関する書籍だった。一旦、美学書を読むのを離れて、届けられた下記の経済学書を全て読む。

1. Doughnut Economics: Seven Ways to Think Like a 21st-Century Economist

2. Economics for the Common Good

3. The Value of Everything: Making and Taking in the Global Economy

4. Development as Freedom

5. What's Wrong with Economics?: A Primer for the Perplexed

6. How Money Works: The Facts Visually Explained

昨日見つけたエドワード･サイードとダニエル･バレンボイムが音楽について語っている数冊の書籍については明日か今週末にでも注文しよう。日本に一時帰国した際に、ある協働者の方が書籍を受け取ってくださることを快諾してくださったので、今日は日本のアマゾンから和書を注文し、その方のところに送らせていただく。

和書で購入を考えているのは、今道友信先生の倫理に関する書籍、その他には悪に関する哲学書などである。あまり多くの書籍を送っては迷惑になるであろうから、5〜6冊程度に留めたい（追記：結局8冊送らせていただくことになった）。出版年が新しい書籍に関しては、大型書店で自分で買えるのだ。送らせていただく書籍は、出版年が古く、大型書店ではもう取り扱っていないようなものだけにする。

昨日も雑多なことを考えていた。何をもって教育の成功や失敗とするのかは難しいが、少なくとも、自分の内側の声を発見するということは教育の成功や失敗について語る時に見落とせない観点かと思う。

発達の原理は、内側から開いていくことであり、その原理に沿って私たちは内側の固有の声を発見し、それを育んでいく。それが健全な発達プロセスであることを考えると、内側の声を発見できないというのは、教育の失敗を意味するのではないかと思う。ここで述べている教育というのは、学校や親を通じた教育のみならず、自己教育も含む。自分の声がいつまでも抑圧され続けること。それはやはりどこか不健全だ。

教育哲学者のザカリー･スタインが述べるように、現在の自由が将来のより大きな自由につながるかという発想は教育や成長支援において大切である。将来のより大きな自由につながらないような、目先の自由らしきものに惑わされてはならない。それは結局将来の不自由さをもたらすという点に

おいて、現在においても不自由なものだと言えるかもしれない。フリースクールムーブメントの失敗はこのあたりにある。今日もまた読書を通じて雑多なことを考えていくだろう。それら全てについて書き留めることは難しいだろうから、いつものようにその一端を書き留めておきたい。フローニンゲン：2020/8/26（水）06:48

6157. 今朝方の夢

時刻は午前7時に近づきつつある。少しばかり強い風が吹き、雨がしとしとと降っている。昨日と同様に、今朝もまた肌寒く、もう窓を開けていられなくなった。そして、長ズボンを履いて室内で過ごすようになった。8月はまだ終わっていないのだが、この時期のフローニンゲンの気候はそのように寒さを感じさせるほどだ。

それでは今朝方の夢に振り返り、創作活動と読書に励んでいこう。今日からは読書領域を変えて、美学から経済学に移る。新たな書籍が届くまでは、ここからしばらく集中的に経済学関係の書籍を読んでいく。それらの書籍に共通しているのは、現代経済学のおかしさと、既存の経済思想と経済的枠組みがもたらす社会の闇を照らし出している点にある。

経済の領域においては、それらは今の私にとって探究したいテーマである。大学時代に学んでいた経済学の知識を更新するという意味も確かにあるが、それは単なる更新ではなく、知識体系においては構造的に大きな変容をもたらすものになるだろう。

今朝方の夢。夢の中で私は、ある日本人の著名な学者の方と政治について話をしていた。今に始まったことではないが、閉塞的な政治空間を変容させていくために、ギリシヤから政治家を何人か呼び、彼らを含めて80人ぐらいの人数で新たな政党を作ろうという話になった。その学者の方は政治に精通しており、政治の世界には諸々の汚職が多いので細心の注意をしなければならないということを話していた。そのような夢の場面があった。

政治に関する話題に少しでも触れるような夢を見たのは初めてのことかもしれない。今の私の関心は、政治経済にも及んでいて、それが影響しているのだろうか。また、なぜギリシャの政治家を呼ぼうとしたのかについても興味深い。それは先日、アテネに私が足を運んだからなのだろうか。それと

も今の日本の政治的閉塞感を打破するためには、古代ギリシャで行われていたような政治の根本に立ち返ることが求められていることを示唆しているのだろうか。

次の夢の場面では、私はウォータースライダーのスタート地点に腰掛けていた。私の目の前には黒人の比較的若い女性と、その女性と繋がりがなさそうな比較的若い白人男性がいた。黒人の女性は、まだウォータースライダーを滑り降りたくないと思っていたようなのだが、手を滑らせてしまい、そのまま下に滑り降りて行った。その後、白人男性も彼女に続いて下に滑り降りていった。

2人が滑り降りる様子を見届けた後、私もそろそろ下に滑り降りていこうかと思った。しかしその前に、ウォータースライダーのチューブの一角に、オリーブルオイルがこぼれていることに気づいた。どうやらそれを顔や手に塗ると、ウォータースライダーを滑り降りている最中の日光から肌を守れるらしかった。私は滑り降りないように気をつけながら、オリーブオイルがこぼれている場所まで向かった。見ると、そのオリーブオイルはなかなか高級そうなエクストラヴァージンタイプのものであることが見た目からわかった。そして早速顔や手に塗った。

いざ下に滑り降りようかと思った時に、白人の女性が何の問題もなく器用にもウォータースライダーのチューブ上を歩いてきて、私に水を差し出してくれた。その水は、お猪口ぐらいの容器に入ったわずかばかりの水だった。その水はブランド水であり、とても希少性のある水で有名だった。その水を口に含んだ時、硬水のしっかりとした硬質感があり、それでいて味はまろやかだった。

水を飲み終えた後、私はウォータースライダーをゆっくり降りていった。ゴールが見えた時、脇から人の声が聞こえてきた。何やら、ゴール地点にいく前に、そこからジャンプしてチューブの外に出れば、その施設の目玉であるオークション会場に行けるとのことだった。しかし私はそれに関心がなく、そのまま滑り降りた。

すると突然、どこからともなく懐かしいテレビゲームの音が聞こえてきた。それは幼少時代にやってきた格闘ゲームのBGMだった。私の横には小中学校時代の友人がいたので、彼とそのゲームを一緒に行うことにした。彼は見るからに強そうなモンスター的なキャラクターを選び、私は純粋な人間のキャラクターを選んだ。いざ対戦が始まると、最初は相手キャラクターのリーチの長さに苦戦した

が、最終的には逆転勝利を収めた。今朝方はそのような夢を見ていた。フローニンゲン:2020/8/26(水)07:16

6158. 個人投資家にとって魅力的に感じられるオランダの税制について

時刻は午前10時半を迎えようとしている。起床時に引き続き、今も雨が降っている。この雨は今日は止むことがないようだ。それにしても今朝は寒い。もう長ズボンだけではなく、長袖も着用し始めた。無い物ねだりというか、現金というか、ここまで急に寒くなると、暑いあの夏が再び戻ってきて欲しいとさえ思う。もちろん猛暑は避けたいが、夏の暖かさがとても恋しいことは事実だ。それぐらいに今日は寒く、明日からも引き続き寒い日が続く。

暖かいコーヒーを飲みながら、個人に対するオランダの税金について考えていた。来年の税金の支払いに向けて、自分でもさらにオランダの税制について勉強しようと思って色々と調べ直してみた。

個人に対するオランダの税金制度でユニークな点は、何と言っても投資でのキャピタルゲインの利益に対して課税がされないことだろう。例えば日本では、国内居住者として株式などの投資で利益をあげれば、一律20%ほどの課税がされる。しかし、オランダではそうした課税はなく、純資産に対して課税がなされるという面白い仕組みがある。直感的かつ感覚的に、個人投資家としてはオランダの税制の方が好ましいように思える。オランダは投資に対してフレンドリーな国なのかもしれない。投資というものが社会に貢献する限りにおいて、投資を積極的に促進しようとする考え方が背景に見える。

幾分アメリカ式な点は、オランダに居住していても、日本人であれば、日本で所有している金融資産に対しても課税がされることだろうか。つまり、日本で金融資産を持っていれば、それを含めて総資産とみなし、そこから負債を引いた純資産に対して課税がなされるのだ。

少しばかり具体例を挙げてオランダの税金について考えてみたい。例えば、オランダに居住する独身の日本人が、日本円で1千万円ほど持っていて、今年投資で9千万円ほどの利益を挙げたとする

──この人はこの年大きく投資で利益を挙げたかのようなキャピタルゲインだ──。すなわち、総資産が1億円になった場合を想定してみる（負債はなしと仮定して、純資産1億円を想定）。

最後に言及するが、オランダは2022年をめどに、税制が変わり、より免税の幅が増えるような制度になるようだ。それでは上記の例について税金を計算してみよう。前提として、保有される純資産に対してどのくらいのキャピタルゲインを得るかはオランダ政府で推定割合が決められており、設定された「推定キャピタルゲイン」に対し、税金（一律30％）がかけられる。最初私は30%という数字を見た時に高いと思ったが、これから紹介するように、純資産に対して30%の課税がなされるのではなく、純資産をもとに算出された推定キャピタルゲインに対して30%が課税されるという点に注意が必要だ。言葉だけではわかりにくいので、早速具体例を通して考えてみる。

2020年においては、独身世帯の場合は30,846ユーロを上限に免税になる（カップル/税務パートナー世帯の場合は61,692ユーロを上限に免税になる）。まずは免税額を産出し、免税額を超えている資産に対して、下記の3つの課税枠に基づいてキャピタルゲインを計算していく必要がある。

第1枠：免税額より上の額から72,797ユーロまで= 推定キャピタルゲイン率 1.799％

第2枠：72,797ユーロ以上から1,005,573ユーロ以下= 推定キャピタルゲイン率 4.223

第3枠：1,005,573ユーロから= 推定キャピタルゲイン率5.33％

上記の推定キャピタルゲインの合計に対して30％の税率をかけたものが課税となる。

それでは実際の具体例として、先述した、オランダに居住する独身の日本人が、日本円で1千万円ほど持っていて、今年投資で9千万円ほどの利益を挙げ、2020年の1月1日時点で総資産を1億円持っていたとする。オランダでの税金の支払いはユーロなので、1億円を796,900ユーロ（本日日付のレートで換算）として計算する。

2020年1月1日における負債がないと仮定して、純資産は796,900ユーロであり、この日本人は独身なので、30,846ユーロまでは免税である。すなわち、796,900−30,846（免税上限額）=766,054ユーロが課税対象となる。そしてここから3つの枠を順番に適用していく必要がある。

第1枠に入る資産額は72,797ユーロなので、この金額に推定キャピタルゲイン率1.799％をかけ、1,309ユーロが課税となる。そしてここから、当初の課税対象の766,054ユーロから第1枠の額を引き（766,054-72,797）、その残りの693,257ユーロが第二枠に入る。693,257ユーロに推定キャピタルゲイン率4.223％をかけると、29,276ユーロとなる。

純資産の量は第3枠の適用に満たないので、ここまでの計算で推定キャピタルゲインが算定される。すなわち、推定キャピタルゲイン額の合計は1,309+29,276=30,585ユーロになる。この金額に対して一律30%の課税がなされるので、結局支払う税金は、30,585*30%=9,175ユーロになる。まとめると、純資産1億円（796,900ユーロ）に対して、合計1,151,336円（9,175ユーロ）の税金支払額となる。

もちろん、その他に所得があれば、そちらの所得税についても計算する必要があるが、純粋に投資から得られた利益に対する課税に関して言えば、日本では投資で得た9千万円のキャピタルゲインに対して一律20%の18,000,000円の税金支払いが発生するが、オランダではそれが1,151,336円に抑えられる。投資家にとってみればこれは大きな違いだと思われる。

ここからさらにオランダの税制について調べていると、2022年からは資産の免税範囲が大幅に拡張されるそうだ。そもそもオランダ政府は、推定キャピタルゲイン率というものを、人々が資産運用していることを前提とし、ある一定量の資産を保有していれば、何もせずともある一定の投資利益を得ているであろうという前提でそれを設定しているのだが、オランダ政府は既存の推定キャピタルゲイン率が高いことを認定したようだ。

まだ確定ではないが、2022年以降においては、最大440,000ユーロ（約5,500万円弱）の純資産額がほぼ免税になると考えられており、免税額を超える純資産額に対しては、現在の銀行の金利（かなりの低金利）に応じて課税がなされるとのことである。これによって、個人にとっては資産税が随分と低くなると思われ、税金を納める側としては嬉しいニュースかもしれないが、それで政府の財源はきちんと確保されるのだろうかという疑問もある。しかしおそらく、所得税に対する課税制度はそのままであり、おそらくそちらの税収や他の税収によって十分に財源が確保できているという計算が成り立ったから今回の税制の改正がなされるのだろう。いずれにせよ、個人投資家として活動していく上でオランダは税制面の観点からとても友好的だと思う。ただし、上記のような資産規模になっ

てくれば、運用をしていかないと、毎年資産税によって資産が目減りしていくということも忘れてはならない。フローニンゲン：2020/8/26（水）11:10

6159. トークンエコノミーの探求/価値の再定義

時刻は午後7時半に近づきつつある。今、再び小雨が降って来て、雨滴が書斎の窓に付着している。

今日は1日を通して肌寒く、午後のいっときを除いて、長袖と長ズボンを着用していた。明日は雨は降らないようだが、今日と同じぐらいの気温である。

今日から経済学に関する書籍を読み始めた。その中で、あらゆるものを金融化する流れについて考えを巡らし、すでに到来し始めているトークンエコノミーについて色々と考えていた。とりわけトークンエコノミーは関心のある分野でもあるため、別途専門書を購入しようと思った。引き続きプラットフォーム資本主義が続くだろうが、そこからはトークン資本主義の勢力が力を増していくように思える。トークン資本主義の意義や問題について、少しばかり先回りしてあれこれ考えておこう。

プラトンはかつて、重要なことはこの世界でいかなる物語が生成されているのかを監視し、適切な物語を選び取っていくことであると述べていた。現代においては、代替的な物語を選択するというよりも、病理的な物語を特定し、その治癒と変容を実現させていくことが求められるのではないかと思う。

とりわけ経済価値に付帯する物語の病理を把握し、それを癒しながらにして変容してくことが求められるだろう。そもそも、経済価値というものを再定義する必要があるかもしれない。マルクスが述べるように、価値とは時代の変遷によって変わっていくものなのだから――普遍的な価値というものも存在すると思うが、少なくとも現在語られている経済価値は極度に一面的なものだろう――。また、経済価値のみならず、その他の様々な価値についても見直しが必要になってくるだろう。既存の価値を信奉している限りは、これまで同様の行動が継続される。既存の経済価値を信奉している限りは、生産消費的な行動が繰り返されるだけなのだ。そこにより創造的な行動が生み出されて欲しいと思う。創造的な行動。それは治癒的であり、変容的であり、解放的なものである。

今日はこれから少しばかり曲の原型モデルを作成し、その後にメールの返信を行う。それが済んだら、再び経済学書を読み進めていこう。今日中に2冊目の書籍を読み終えるかもしれない。その瞬間の自分が納得する響きを求め、それを形にしていくことを続けていくこと。小手先の技術を技術として学ぶのではなく、納得する響きを求める過程の中で、自然と技術を高めていきたい。兎にも角にも、自分が納得する響きを生み出していく。納得するかどうかは、その瞬間の自分の内的感覚に音の響きが合致しているかどうかだ。あるいは共鳴しているかどうかだ。

今日もまた、十全に創作活動と読書に取り組めたことを嬉しく思う。感謝の念を持って就寝をし、明日に備えたい。フローニンゲン:2020/8/26(水)19:29

6160. 秋の一時帰国に向けて:石川県金沢市の兼六園

時刻は午前6時を迎えた。今、空がダークブルーに変わり始めている。

昨日は起床直後から雨だったが、今日は雨が降っていない。天気予報を見ると、今日は夜から雨が降り、明日はその雨が夕方まで降り続けるようだ。今の気温は随分と寒く、もう長袖と長ズボンを着用している。振り返ってみると、今年の夏は本当に短かった。夏がやってくるのがそもそも遅く、ずっと肌寒い春の季節が続いていて、そこから突如10日間ほど気温が上り、それが嘘のようにスッと過ぎ去っていった感じである。

昨夜、日本のアマゾンを通じて8冊ほど和書を購入した。それらはお世話になっている協働者の方の自宅に送らせていただき、日本でお会いさせていただくときに受け取らせていただけることになった。先日50冊ほど書籍を注文したばかりであるが、届いた本から順番に食い入るように毎日本を読んでいると、それらもすぐに初読が終わるように思える。ここ最近は以前にも増して自分の関心領域が広がっているのを実感している。今週末には再度欧州のアマゾンを経由してもう10冊ほど書籍を購入する予定だ。

昨日から読み始めた貨幣の仕組みに関する書籍が秀逸であり、そのシリーズとして政治学、社会学、環境学のものもあるようなので、それらも購入したい。その他にもいくつか購入したい書籍が新たに見つかったので、それらと合わせて週末に注文をし、それをもって8月の一括注文を終える。

昨日、ある協働者の方のメールの中に、お盆休暇を使って石川県の金沢市にある兼六園に訪れた話が書かれていた。兼六園は、日本三名園の一つに数えられる庭園である──その他の2つは、岡山市の後楽園、水戸市の偕楽園──。

今年の秋の一時帰国の際には、福井県に立ち寄り、その後石川県に訪問する予定である。ちょうど金沢にも滞在しようと考えていたところだったので、ぜひ兼六園に足を運びたい。兼六園の近くには石川県立美術館と金沢21世紀美術館があり、こちらの美術館にも足を運ぶ。石川県の滞在は日程的にも余裕があると思うので、2つの美術館には別々の日に訪れようと思う。

金沢には他にも見たいと思う歴史的な建造物や博物館がいくつかある。10月の中旬は気候が良いであろうから、金沢の街を散策するにはもってこいである。きっとその頃の金沢は美しいであろう。気がつけばもうすぐ9月であるから、秋の一時帰国の際の宿泊施設の確保をそろそろしておこう。福井と石川で訪れたい場所のリストをざっと作り、滞在日数を確定させ、落ち着けるホテルを見つけたい。もしかしたら、旅館のような場所でもいいかもしれない。久しぶりに日本の落ち着いた和の感じを味わいたいものである。フローニンゲン：2020/8/27（木）06:25